

黒土

この地域の田んぼの土は他の地域の土に比べると黒い。田んぼに適した土は水分や栄養分を逃がさないように持っている性質があり、さらに田んぼの下にゆっくりと水がしみ込んでいくような水はけのよい土地が理想的である。黒土の特徴として水はけがよいということが挙げられるので田んぼの土に適しているといえる。地元の方によると、土が黒い理由は海岸が近くにあるかららしい。



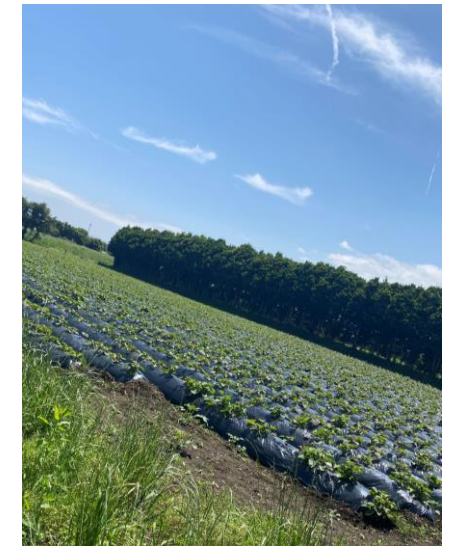
なし

都農町のなしの発祥は新今別府地区で、この地域では10種類以上のなしが栽培されている。果樹園畑の周りを囲っている木々は防風林と呼ばれるもので、台風などによる被害を軽減する役割がある。何も無い土地からなしの栽培を一から始めようとする10a当たり約100万円もの費用が掛かるため、次の担い手がなかなか出てこない。



ジャガイモ

ジャガイモ畑が広がっていた。紫色の花が咲いていた。



サツマイモ

サツマイモ畑が広がっていた。畝に黒色のビニールが敷かれており、そこに苗が植えられていた。



スイートコーン

都農町で栽培が盛んな作物といえばブドウというイメージが強いが、この地域ではスイートコーンの栽培も盛んなようだ。実習に行った5月ごろから収穫・出荷作業が行われていた。



ブドウ

ブドウは風や雨に弱いため、それらからブドウを守るためにビニールや網が張ってあった。食べやすさや加工のしやすさを求めて種なしに品種改良された。新しい品種が出てきているが、昔ながらの品種の人気のほうが高い。

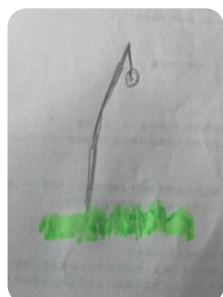


ミニトマト

ビニールハウスで栽培を行っていた。収穫は11月の終わりから6月半ばまでと長期収穫が可能である。収穫が最も盛んなのは2, 3月である。1かご当たり900~1200個のトマトが入る。トマトの受粉は蜂に手伝ってもらっている。農薬が高騰しているため、虫取り紙を使って節約している。寒冷期にも室内の温度を一定に保つため機械を利用しているが、重油の価格も高騰しているため年間100万円の費用がかかっている。しかし、補助金が出ているペレットではなく、重油を使い続ける理由にはペレットを使用した後に出る灰の処理に手間がかかることやペレットを燃焼させるための機械が高いことが挙げられる。

謎の棒

ここでは梨畑の中に4～5メートルほどの棒が一本だけ立っていた。この棒がどのような目的で立っているかわからず、最初は避雷針ではないかと思ったが畑に避雷針を立てる必要がない。そのため、右の予想図のような鳥よけのDVDなどを吊っていたものではないかと考えた。



予想図

新今別府の記念碑

この地域では火山灰土壌のため降雨時には、土壌の流出、また排水路の土砂により通水不足をしていた。加えて病害虫などの原因で農民の農業意欲が阻害されていた。そのため農地保全整備事業（排水路、関連農道の整備）を実包し完工したときにこの碑が建てられた。都農町は、いたるところで葡萄やお米などの農業がおこなわれており、この記念碑の事業の成果が表れていると思った。この事業のおかげで今の都農町の風景があると考え、このことは都農町にとって、とても重要なことであったと考えられる。



愛宕神社

こちらの神社は八坂神社と違って規模がとても小さかった。大きさは一軒家よりも小さく倉庫くらいの大きさであった。しかし中や周りはいきれいに整備されており地域住民がしっかり管理しているものと考えられる。中には御神体と思われる物があり、それ以外のものはほとんどなく質素なつくりとなっていた。愛宕神社は火防の神様を祭っており、この場所は家が多くあるためこの神社があると考えた。



ソーラーパネル

この地域ではソーラーパネルの多さも目立った。新今別府には主に一軒家ほどの大きさのものが何件かあった。町の産業の一つだと考えられるが、ソーラーパネルの寿命が来た時の土地がどうなるのか、また、この土地は、土ではなく、砂利が敷き詰められていたが、どうしてわざわざ砂利をもってきたのか気になる。このソーラーパネルは、所々みられる、空き地などの余った土地で産業をしようとして作られたものであると考えられる。



八坂神社

一般的な神社は、御神殿の外側にしめ縄がされているが、八坂神社のしめ縄は御神殿の中に祭られてあった。その御神殿の中に黒い顔で目と口周りが赤く縁取られたお面があった。境内には、灯籠や、鳥居、手水舎らしきものがあった。また、青島神社と同じように敷地内にビロウが生えており、これは宮崎の神社の特徴である。



用水路

都農町は水資源がとても豊富で、私たちが調査した、新今別府地区、新田地区にも大小さまざまな水路が張り巡らされていた。水の透明度もとても高く、清流であった。このことは、農作物栽培が盛んである要因の一つであると言えるのではないかと考えた。そして、水の流れる音がよく聞こえてくるほど勢いがよく、水力発電に活かすことができるのではないかと考えた。小規模の水力発電をこれらの水路に置けば、再生可能エネルギーを作ることができるのではないかと考えた。また、都農町は、山が近いので、下の方の写真の用水路のようにして高低差があっても水の移動ができるようにしたのではないかと考えられる。



トマトの無人販売

この無人販売所で売られているトマトは傷がついたなど訳アリのトマトを3つや4つ入りで100円で売っていた。廃棄物を出さないために良い取り組みだと思いが売られている場所が細い道で地域住民しか買えない可能性が高いと思われる。売っている量からして地域住民だけでは消費しきれないと考えられる。そのため近くの旧国道10号線のところで売るなどしてこの道を通った人が買える取り組みをしていくべきだと思える。



八坂神社近くの記念碑

県営圃場整備事業記念碑が建てられていた。これは、都南土地改良の事業の一環で建てられ、長方形の石板には、平成元年に建てられたということと、この事業に関わった方々の名前が記されていた。



ここでは、地域福祉バスの「新田」バス停があった。このバス停に就航している路線は3路線で、各路線の運行本数は平日の週5日間に4本運行している路線が1つ、週に2日1本のみ運行と週に3日1本のみ運行路線がそれぞれ1つある。尚、1回の利用料金は200円(障がい者手帳を持っている人は100円)である。交通量の少ない地域ではバス停ではなくても手を上げれば乗車することが可能となっている。

これらを踏まえた地域福祉バスの利点は、タクシーなどに比べて比較的安い料金で利用できるということと、交通量の少ない道路であれば手を挙げれば止まり停車してくれることが挙げられる。バス停以外でも乗車できることは、足の不自由な人やお年寄りにとってはありがたいはずだ。

反対にこの地域福祉バスについての課題は、1日の運行本数が少ないので、乗り過ぎしてしまった時に代替の策がなければ、どこにも行けなくなってしまうということが挙げられる。運行本数が少ないからと言って、むやみやたらに本数を増やしても、採算問題があるため本数を増やすことは、現実的ではない。

よって、地域福祉バスと同時に地域福祉タクシーを作り、ハイブリットで運用していくことを提案する。地域福祉タクシーは、バスが運行している地域を対象にバスの時間とは関係なく通常のタクシーのように利用することができるもので、料金はタクシーよりも割安で設定する。そうすることで、自分の時間に合わせて通院や買い物を行えるようになるはずだと考える。



地域福祉バス「新田」バス停



地域福祉バス「新田」時刻表



フィールドワークを行っている途中に耕作放棄地がいくつか見受けられた。田んぼだけでなく、畑やぶどうや梨の果樹畑においても耕作放棄地は見られた。農家さんによると、高齢化が進み、農作業ができない状態になってしまっているとのこと。さらに、梨農園の農家さんによると、高齢化に加えて近年の温暖化や異常気象により、梨が育てられなくなってしまい引退する人も多い。梨農園の場合、1枚目の農業のページでも記述しているが、一度栽培をやめて、木などを撤去した状態の畑を栽培が行える状態に戻すまで、10aあたり、約100万円の費用が掛かるため、次の担い手が現れないという問題もある。

この事より、農業面においても高齢化の影響を大きく受けている。さらに、地球温暖化や異常気象といった地球規模の問題も地域の生活に影響を及ぼしている現状が問題であることがわかる。土地という資源があるにもかかわらず、その資源を活用できないことはとても残念なことだ。

これを改善するためには、農業を引退する前に、一度、役所などにやめる旨を報告し、農地を利用したい方に貸し出す制度を作ることを行ってみると良いのではないだろうか。こうすることで、耕作放棄地の数を減らすことに繋がるのではないだろうか。



この写真は、ビニールハウスのビニールがはがされ、中には雑草が茂り始めている状態の写真である。このほかにも、放棄地となった梨農園では果樹のなる木が抜かれ、雑草の多状態で放置され、畑の周りに防風林が残っている状態の場所もあった。

こちらの家庭では、所有している水田で稲作を営み、家の庭野菜や果物の家庭菜園を楽しんでいた。現在ご夫婦で2人暮らしをされており、趣味が家庭菜園とのこと。そこで定年退職後にご自宅の横にある畑にて家庭菜園をはじめられた。そこで栽培した野菜や果物をご近所さんや、宮崎市に住むお子さんやお孫さんに差し上げている。では、どのような家庭菜園されているのか。そこで栽培されていたものは、カボチャや玉ネギ、にんじん、キュウリ、ナス、里芋といった野菜だけではなく、キウイや柿、ブルーベリーなどの果物まで栽培されていた。栽培法も驚くもので、一度自分で食べておいしいと思ったものの種を発芽させ、そのまま植えるものもあれば、気に入った果樹の苗木を接ぎ木という形で栽培していた。接ぎ木の仕方も数種類もありとても興味深いものであった。さらに、ご家庭の庭木の剪定は定期的にご主人自らが行っていた。



もう一方お話を聞けたご家庭の方は、地域の青年サッカーチームに所属している方だった。

こちらのご家庭もご家庭の敷地内の畑にて、ナスなどの野菜を栽培していた。ここで興味深いお話を伺った。それは、この地域の土の種類だ。彼は、もともと日向市に住んでいて、日向市に在住している際は、都農町のような黒土を見ることはなかったそうで、都農町の黒土が欲しいという日向氏や門川町の人もおっしゃっていた。この黒土のおかげか、家庭菜園で採れる作物もしっかりとした上等なものができるらしい。水や気候だけでなく、この土も地域の資源を支える重要なカギではないだろうか。

[総括]

都農町の中でも新田地区と新今別府地区の一部をフィールドワークで回る中で、主に農産物の資源がとりわけ多いと感じた。農産物以外では、地域に根差した神社や、尾鈴山がもたらす湧水といった資源がいたるところで見受けられた。とりわけ、湧水に関しては、都農町の海が近いゆえに山も近いという地形的特性がある関係で、碁盤の目のように張り巡らされた用水路に多くの透明度の高い水が流れていた。その一方で、空き家や空き地、耕作放棄地といった高齢化等が起因して発生している社会問題もあった。他にも、地域住民の皆さんが快くインタビューを受けてくれたことに加え、家庭で取り組まれている活動や地域の皆さんと協力して行っている活動など、目に見えない形での資源というものも見受けられた。

これまでの講義を踏まえ、我々の班ではこの実習を通して、一般的にいう資源である農作物や水といった自然の資源だけでなく、地域住民の活動なども肌で感じる事ができた。その上、空き地などの社会的問題も、資源として捉えることができるのではないかと考えた。というのも、空き家や空き地というのは、当該の場所で新たな事柄を行うことができるという可能性を秘めているからだ。空き家に関していうと、

持ち主不明物件や再建築不可能物件という理由により、土地の売買や活用がしづらいという実態があるが、そのような土地であっても太陽光発電などを設置するといった活用法がある。ただし、太陽光発電を行うという場合には、太陽光発電で得られる利益等を考えなければならないだけでなく、太陽光パネルが寿命を迎えた時に、環境への負荷をどれだけ軽減させられるかということも考えながら設置する必要があることは留意しておかなければならない。

最後のスライドでまとめた新田地区・新別府地区の一部における地域課題に関しては、地区の住民に高齢者が多いということ象徴するかなのようなものであると感じた。なぜなら、地域福祉バスは、バス会社が運用する路線バスが走っていない場所に運行されているもので、運行本数の少ないものだと考えているからだ。さらに、耕作放棄地も高齢化の影響で、農地の保有者が農地の維持や管理が難しくなっているものだと認識しているからである。

これらを踏まえ、高齢者の増加から該当する地域の活動や資源を守ることを意識した取り組みを行う必要があると考える。そうすることで、地域が抱える私たちが発見した課題の解消につながるだけでなく、より町の発展へと繋がるまちづくりというものを行うことができるのではないだろうか。